Ⅳ　周辺における近世末期の武家屋敷について

近世後期の本多氏時代の城下町絵図については比較的多く残されており、当該地の侍屋敷についても明確に記されている。今まで現況図と古絵図面と実際に対照する事はあまりなかったが、飯山市では最初の侍屋敷の発掘調査を実施したことから、こうした作業も当然必要であると考え、ここでは、印刷物として刊行された「江戸末期　城下町絵図（写）（本多芳治氏蔵）（図２）及び飯山小学校所蔵の絵図（図６）を参照して当時の土地所有者について考えてみたい。

飯山市役所敷地は城代本多十郎衛門屋敷地跡

飯山市役所から南側にかけては、当時鷹匠町、福寿町と呼ばれていた一帯で、比較的飯山藩の重職にあった武士の居宅となっている。現市役所のある場所は両絵図とも「本多十郎右衛門」と記載されている。十郎右衛文は飯山城代で、明治２年の階級令では他の２名とともに本多藩主の一族として1等席となっている（飯山町誌）。この本多氏の屋敷面積は大久保家所蔵の文久の絵図によれば1850坪と広大な面積であり、現在の市役所から北信森林管理署の敷地を含む部分と考えられる。

外様代官高野正兵衛屋敷について

さて、今回の調査地区については、発掘当初絵図を参考としておそらく高野正兵衛の屋敷跡付近ではないかと推定していた。高野氏は飯山藩の外様代官としてしばしば文献にも登場する人物である。高野正兵衛が高祖父にあたるという矢口迪子氏のご教示によれば、高野正兵衛は藩の軍学（長沼流）と長巻柄太刀（神武流）の師範でもあり、私的に常平倉を運営して窮民の救済にあったとされる。また、高野氏の出自は、福島正則に従って川中島に入り、正則没後は帰農していたところ本多氏の飯山入城に際して召抱えられたと系図に示されているという。高野正兵衛の父助一郎は、やはり外様代官として文献に登場しているが、市内柳原地区沼ノ池弁天島には、用水改修の感謝の記しとして地元庄屋達が建てた高野氏の記念碑がある。

また、矢口氏所蔵の古文書の中に高野氏屋敷建物の平面図が残されている（図８）。それによれば総坪数64坪八分とあり、畳の敷いてある部屋だけでも一部不明であるが56畳以上もあるかなり大きな建物であったことがわかる。明治２年の階級令によれば１等から９等まで分け、７等以上を士族としており、高野氏は５等席であり、中流の上に入る武家であり、当時の藩士の建物規模を知るうえで貴重な資料である。

情報センター敷地は藩士「安井小次郎」の敷地跡

その後、明治初期の旧藩地地籍地図（図７）や大久保家所蔵の文久年間の屋敷地図など存在していることを知ることができた。旧藩地籍図には地番が記載されており、ほぼ現在と同様であった。また、屋敷内道路がそのまま残されており、現地番が複雑に残されていることから、容易に対比することが可能となった。今回の調査区の地番は1095であり、旧藩地籍図（図７）みると屋敷内道路に接した南側である。道路の北側は一区画のみで、絵図（図２）では「杉原源八」とある。そして1095番地はその南隣で、同じく図2では「安井小次郎」となっている。高野氏はさらにその南隣の1088番地である。

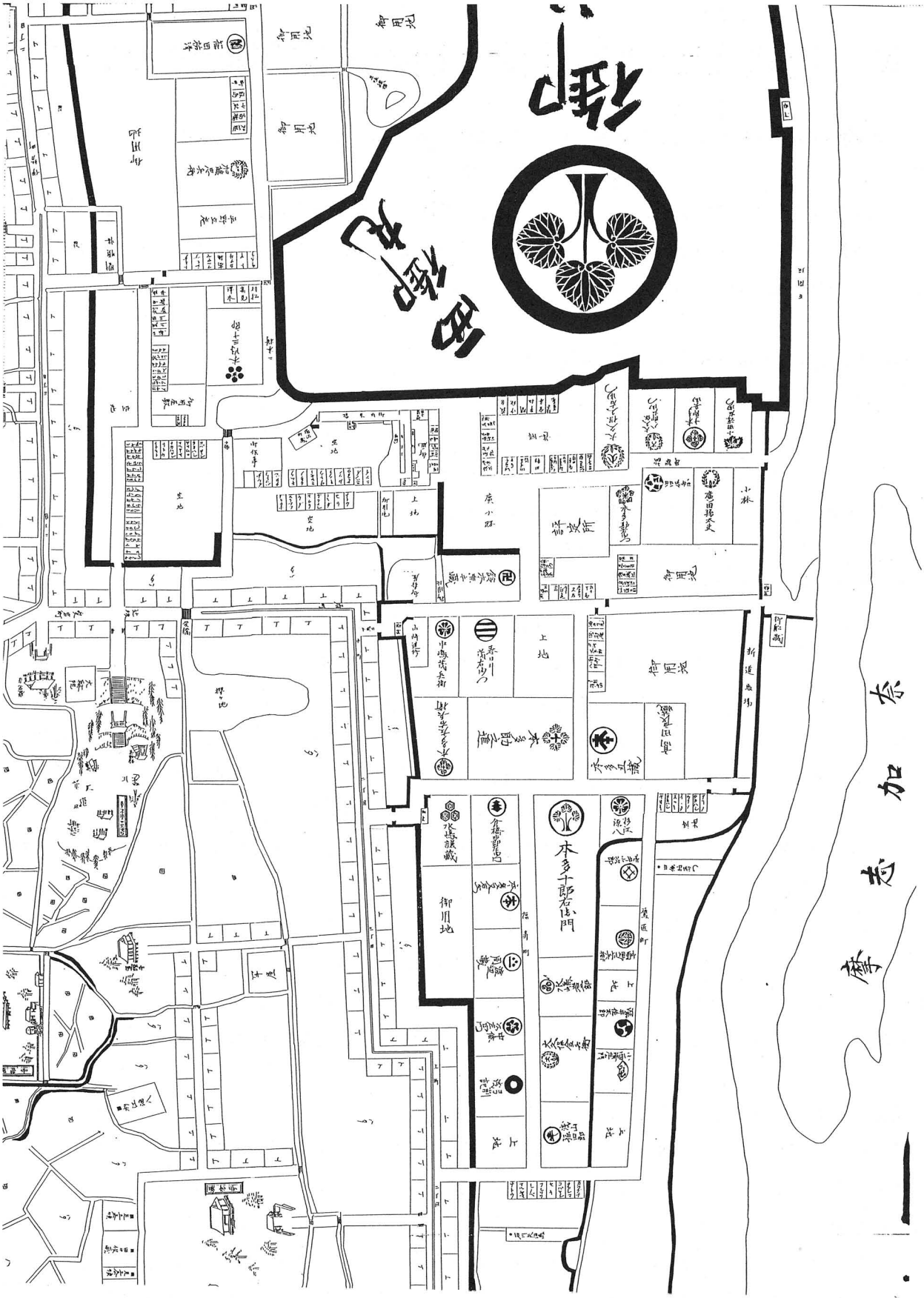

図６　本多氏時代家中屋敷図　部分写・縮小（飯山小学校蔵）

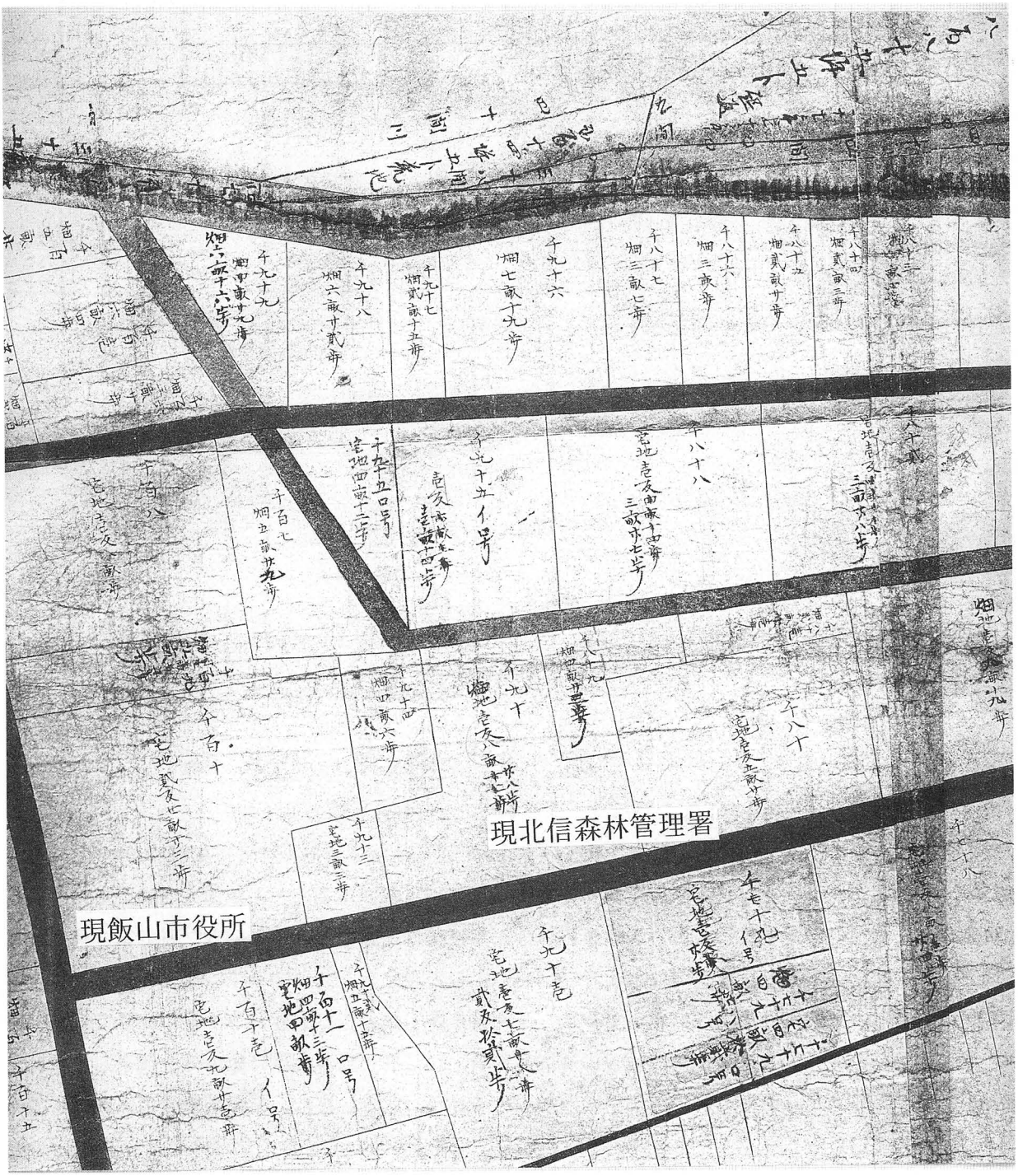

図７　明治初期旧藩地籍図　部分写・１／２縮小（飯山市教委所蔵）

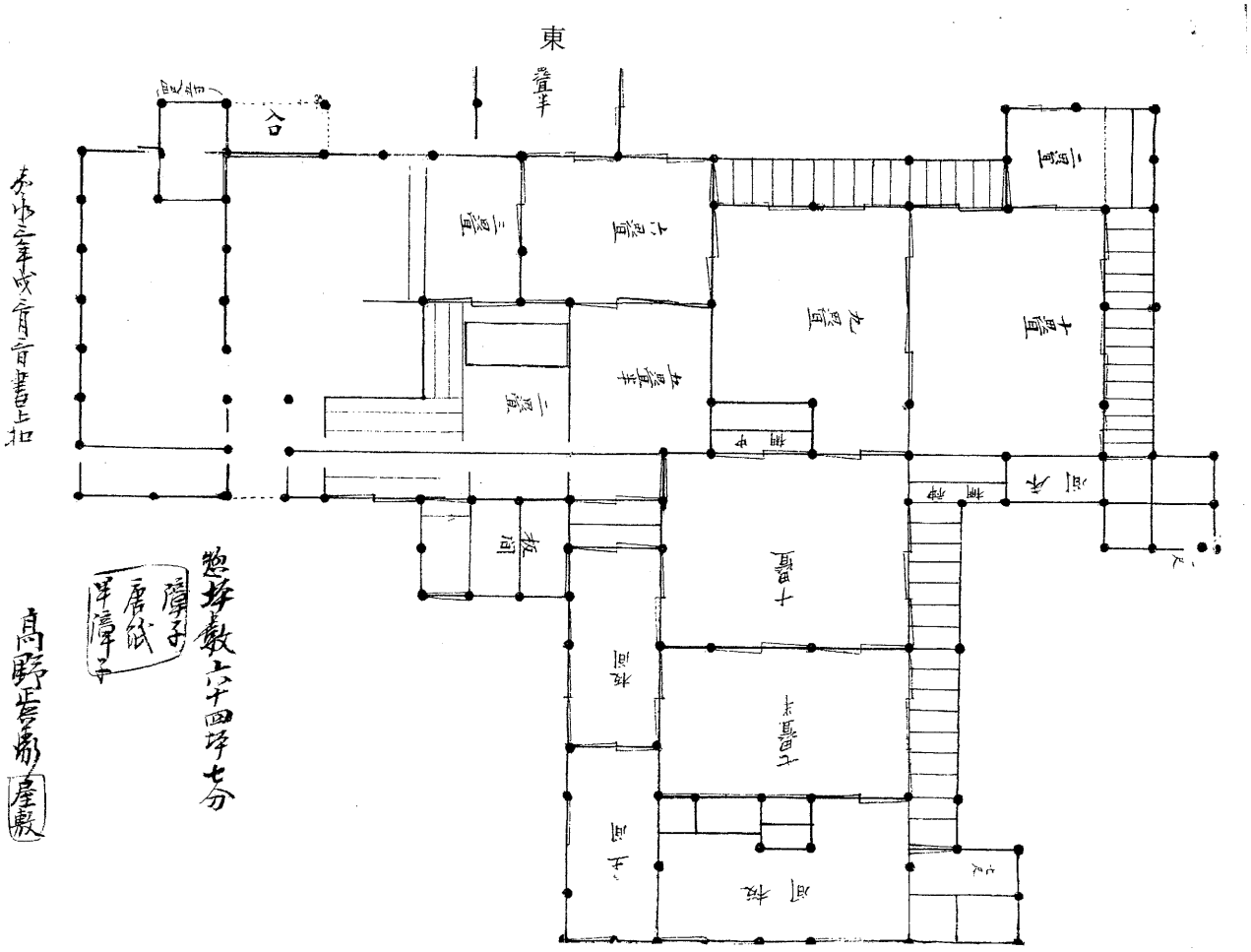

図８　高野正兵衛氏宅間取り図写・縮小（矢口迪子氏所蔵）

以上のことから、今回調査を行った箇所は、江戸末期には安井氏屋敷の場所であったと考えられる。

安井氏については、田川幸生氏が調査されている「飯山藩士・寺子屋師匠の安井幽松について」（高井137号）。それによれば、本多氏の家臣であって享保２（1717）年、本多助芳の飯山入封に従って飯山に屋敷を構え、西念寺の檀中となった。５代は郡奉行・寺社奉行を勤めているという。安井家６代及び７代に「安井小次郎」があり、６代頃の嘉永元（1848）年の安井家の石高は70石で、藩士の序列では70番目の石高である。７代安井小次郎は飯山藩祐筆（公文書を書く役人）であり、寺子屋の師匠でもあったという。そして、８代の安井半左ヱ門は飯山藩権少参事として信州列藩会議に飯山藩を代表して松代に出張しており、幕末から明治にかけては要職にあったことがわかる。また、前記階級令によれば４等席に「安井半左ヱ門」があるので、６代頃の70番目から20～30番目くらいの位置まで出世したといえようか。

以上、絵図との比較で現飯山市役所から南側一帯の旧武家屋敷について調査した結果、概ね図９のように配置されていたのではないかと推定される。今後さらに詳細に探求していきたいと考えている。

いずれにしても、今回の調査区は「安井氏」の屋敷跡だったことが判明した。遺構等はほとんど残されていなかったが、今回の文書調査等で侍屋敷の位置を明確にし得たことの意義は大きい。飯山城下は「歴史的環境」の項でも触れたが、いくつかの火災等の災害により現在残されているものほとんどないが、残されている資料から地道に積み上げていくことが今後とも必要であろう。

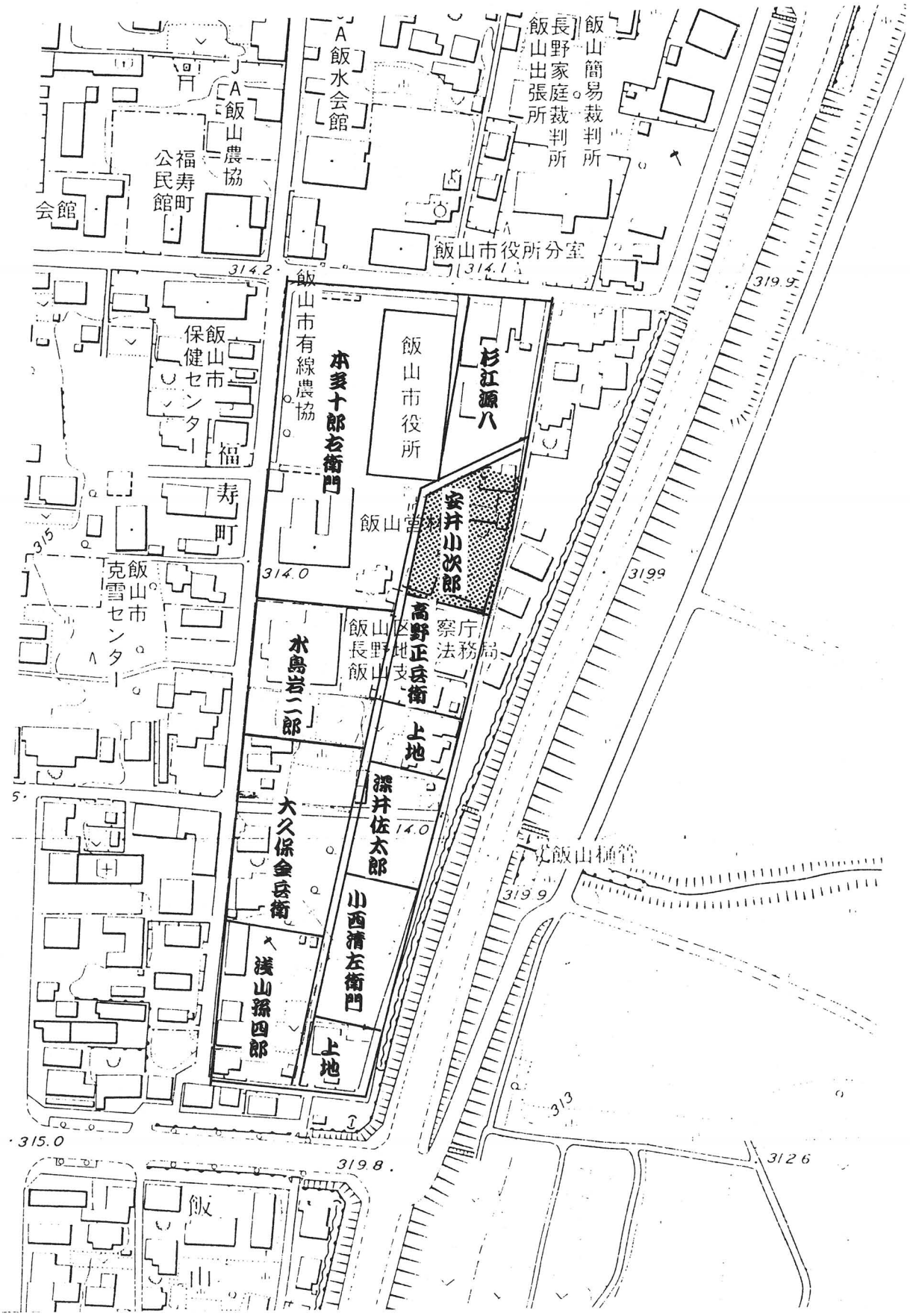

図９　武家屋敷地推定図（１：2000）